1980年代中国共産党の政治思想工作における孔子の地位

御器谷裕樹
（高橋研究会４年）

はじめに
Ⅰ　政治思想工作における孔子の地位
　1　先行研究の概観と本論文の分析枠組み
　2　1980年代孔子宣伝の動態的分析――『人民日報』における孔子の言及
　3　1980年代孔子宣伝の動態的分析――『紅旗』、『求是』における孔子の言及
　4　本章の結論
Ⅱ　共産党幹部の孔子に対する認識
　1　共産党幹部による孔子の言及
　2　政治思想工作における重要政策と孔子への言及
　3　本章の結論
Ⅲ　地方政府による孔子宣伝――曲阜市で行われた孔子文化祭を例に
　1　曲阜市と孔子文化祭の説明と本章の意義
　2　孔子基金会
　3　孔子文化祭開催にあたる地方政府間の関係
　4　本章の結論
おわりに

はじめに

現代中国において胡錦濤政権以降、孔子学院や天安門広場における孔子像設置など孔子にまつわる宣伝が積極的に行われている。しかしこれは本来的には中国共産党のイデオロギーに相反するものである。中国共産党は1919年五四運動に起

源をもち、労働者と農民を代表する階級政党として台頭した。その後長い内戦を経て中国共産党は政権を奪取し、それ以降「国内の封建主義勢力」と「国外の帝国主義勢力」に対する革命を成し遂げたと自称してきた。中国共産党は階級政党として封建主義を象徴する孔子や儒教を徹底的に批判し、中でも文化大革命末期1970年代には批林批孔運動により孔子は執拗に攻撃され、ここにその一つのクライマックスを見ることができる。このように階級政党を自称する共産党はどのような原因で、それまで批判してきた孔子の宣伝に至ったのだろうか。本論文では1980年代に孔子が再評価された原因を探索的に明らかにしたうえで、政治思想工作の中に孔子が組み込まれた過程を動態的に分析する。

第Ⅰ章では『人民日報』、『紅旗』、『求是』といった機関紙を分析することで1980年代において孔子がどのようなコンテクストで語られたかを動態的に解明する。第Ⅱ章では共産党幹部の文選等の分析を通じて共産党幹部の孔子に対する認識を概括し、政治思想政策との関連を解明する。第Ⅲ章では山東省曲阜市で行われた孔子文化祭の実施過程を分析し、地方政府が孔子の再評価に関してどのような役割を果たしたのか分析する。以上の分析を通じて、孔子を再評価する紐帯が1980年代前半には既に成立し、同年代半ばにかけて宣伝に至ったことを実証する。この論考は1980年代に行われた政治思想工作の変更を単なる政策変更ではなく、中国共産党が自身のイデオロギーの正統性の有効性に対して抱く認識の変容を反映していると考えるものであり、従来的な天安門事件の画期性を強調する先行研究に対して新たな考察を付け加えることとなる。

Ⅰ　政治思想工作における孔子の地位

1　先行研究の概観と本論文の分析枠組み

中国共産党は党の政治思想工作について「党が行う人々の思想、観念、政治立場の問題を解決し、人々の思想覚悟を向上させる仕事」だと定義している（範、1989：300）。本論文ではリンチの定義[1]を参考にして政治思想工作を「党や政府が支配の正統性を獲得するために、人々の思考や観念を制御しようとする政策」と定義した。通常、政治思想工作の具体的な手段としては理論化、教育、宣伝等が含まれるが、本論文では主に理論化と宣伝に着目し研究を行うものとする。なお、本論文において正統性とはタイラーによる定義である「論理的整合性を備える規範に対して示される自発的な支持」（Tyler, 1990：8）と考えるものだ。

中国共産党による孔子の再評価及び宣伝は研究の主題として設定されることは非常に少なかった。2000年代初頭以降の孔子の宣伝に関しては孔子学院事業の研究や、2011年の天安門における孔子像撤去を分析した米中経済安全保障調査委員会によるレポートがあるが、いずれも1980年代に孔子が宣伝された過程には言及していない（US-China Economic and Security, 2011）。1980年代の孔子の宣伝に関してブレイディは宣伝組織を分析した研究の中で、儒教がアジア周辺国において安定化作用を持つことや中国社会の専制政治に与することを1980年代半ばに中国共産党が自覚しており、天安門事件以降精神文明の宣伝として新儒教主義が用いられたことを指摘している（Brady, 2007）。フュースミスは1990年代に孔子が宣伝政策の中で特別な地位を得たことを指摘するが、その理論的準備が1980年代に北京大学の一部の学者による再検討が行われていたことを指摘するにとどまっており（Fewsmith, 2008）、同時代の孔子の再評価の起源について根源的な契機の特定に至っていない。ゴールドマンは改革派が天安門事件の責任を問われ政府要職を辞職したことによって、新保守主義派が1990年代に台頭したことが孔子関連の宣伝につながったと指摘している（Goldman, 1999）。そのほか林嘉言は孔子や儒教が中国の近現代以降社会でどのような地位だったかを論じている。林は匡亜明ら知識人が1970年代末には既にマルクス主義を用いた孔子の再評価を行っており、中国政治史の中で画期的な事象であることを指摘している（林、1997）。しかしながら論考の焦点は孔子の教義の解釈や儒教の持つ影響力であり、政治権力（中国共産党）との関係の中で論じているものではない。これには著者の関心が儒教の政治思想の解釈がどのように変化したかという点にあり、当時は中国共産党幹部の日記等の資料が少なく入手できる文献に限界があったためだ。フュースミスやゴールドマンの分析は主に天安門事件以降の政治思想工作に変化があったことに注目しているが、林が指摘するような1970年代末以降の変化を踏まえて1980年代の政治思想工作における孔子の地位がどのように変化したかを解明することは共産党の政治思想工作を理解するうえで重要だと考えられる。

以上をふまえ、本論文では1980年代の政治思想工作における孔子の地位を動態的に描くことで孔子の宣伝が始まった年代を特定し、その政治思想工作に影響を与えたと考えられる事象を解明する。具体的には1980年代前半には既に緩やかな紐帯が形成されることで孔子の再評価が組織的に行われ、1980年代半ばから肯定的な孔子像が宣伝政策に反映されたことを示す。このような内容を実証的に示す理由は以下のようなものだ。前項で挙げたような先行研究は1989年に起きた天安

門事件という突発的な事象による影響を重視している。確かに天安門事件が国内政治に与えた影響を認めることは妥当だが、これらの論考が前提とする天安門事件発生以前の孔子宣伝が限定的だったことは論拠に乏しい可能性があり、資料に基づいて検証する必要性があると考える。そのため本論文では、まず1980年代に孔子が機関誌の中でどのようなコンテクストの中で論じられたかを定量的に分析する。次に1980年代前半から半ばにかけて党内有力者や党外知識人の書信や文選、さらには档案史料を用いることで、地方政府までが参加した形で多様な利益が錯綜した結果、孔子の再評価に前向きな緩やかな紐帯が形成されていたことを実証する。

本論文では結論として1980年代前半から漸進的にこの孔子の再評価は進み、1980年代半ばには孔子の宣伝が明確に観測されていたことを指摘する。この考察によって文化大革命が終了した後の体制内幹部の強い危機感と自己のアイデンティティに向き合い苦悩する姿が浮き彫りになる。これは先行研究が明らかにしてきた天安門事件に対する反応としての孔子宣伝があったという指摘を相対化するものである。本論文はそのような突発的な事象による宣伝政策への影響よりも、むしろ体制内で孔子の再評価が文化大革命の終了後自発的かつ漸進的に検討が進み宣伝政策に反映されたと考えるのである。

2　1980年代孔子宣伝の動態的分析――『人民日報』における孔子の言及

本節では1970年代末から1990年代に至るまでの機関誌における孔子がどのようなコンテクストで登場するかを分析することで、政治思想工作における孔子の地位を動態的に特定することを目的とする。シャンボーは改革開放以降の宣伝部門における政治思想工作を研究し、共産党宣伝部の人事や分掌関係について考察している（Shambaugh, 2007）。また蔡文軒らは80年代の宣伝部門の出版業務の指示系統について詳細な分析を試みている。蔡らは四人組が逮捕されたあと、1979年に政治研究室と国務院研究室が合併したことで論述班が成長し、1980年代の宣伝部門において『人民日報』と『光明日報』が機関紙として重要な役割を担ったことを指摘する（Tsai, 2013：398）。そのような事実や先行研究を踏まえ、本節では中国共産党中央委員会の機関紙である『人民日報』のデータベースを用いて孔子に言及があった記事を収集し、孔子が機関紙の中でどのようなコンテクストで登場したかテキスト分析を用い分析する。

（1）『人民日報』における孔子の登場回数

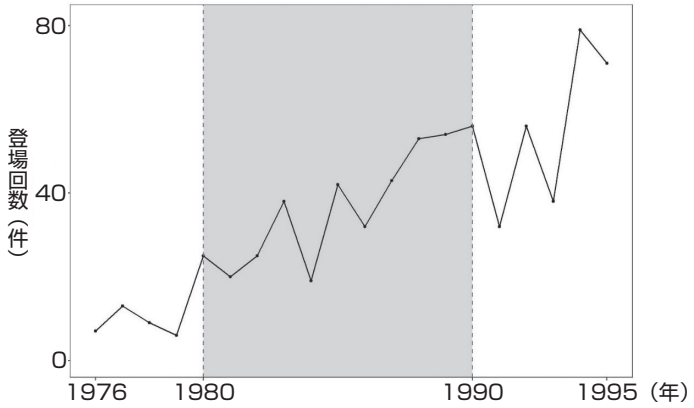
『人民日報』は中国共産党中央宣伝部が発行する日刊紙である。図1は孔子が『人民日報』において毎年いくつの記事に登場したかを示した図だ。

図1のように天安門事件以降1990年代に孔子が政治思想工作において特別な地位を得たことは確認できず、先行研究が指摘するような天安門事件以降の政策変更は『人民日報』からは明確には認識できない。注目すべきは文化大革命が終了したあとに減少していた言及が1970年代末から1980年代にかけて徐々に増加していることだ。しかしながらこの漸増する時系列データは1979年や1984年等前年と比べて大きく件数が減少することがあり、起伏にとんだ原因については（5）で後述する。そのほか、1995年においてさえも年間約80件の言及にとどまっていることは毎日発行される『人民日報』においては年間80件という絶対量としては特段極めて多いという水準ではない。この点については第4節で考察するものとし、ここでは言及量が相対的に徐々に増加していることを指摘したい。さらに、1979年、1984年、1986年、1991年、1993年等前年より減少する年も、過去に減少した年を基準としてそれよりも減少することはほとんどないことは注目に値する。

次に孔子が他の類似した言葉と比較して言及量がどのような推移であったか示したものが図2だ。

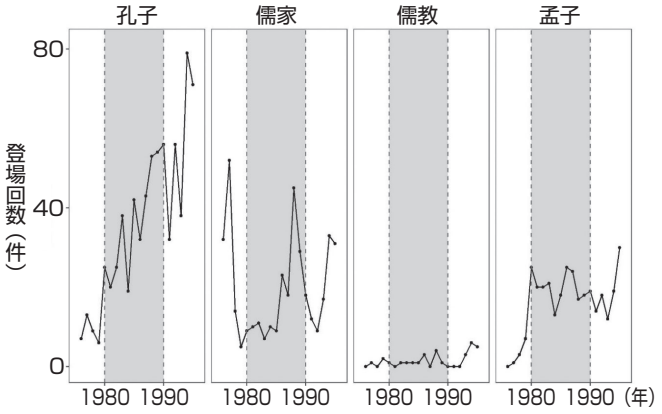
図2より『人民日報』においては1980年代を通じて儒家、孟子、儒教といった語句はそれほど明確な傾向を有した推移をしていないことと対照的に孔子の言及

図1　毎年の『人民日報』における孔子の登場回数（1976-1995年）



（出所）『人民日報』より著者が集計し作成した。

図２　毎年の『人民日報』における孔子関連語句の登場数（1976-1995年）



（出所）『人民日報』より著者が集計し作成した。

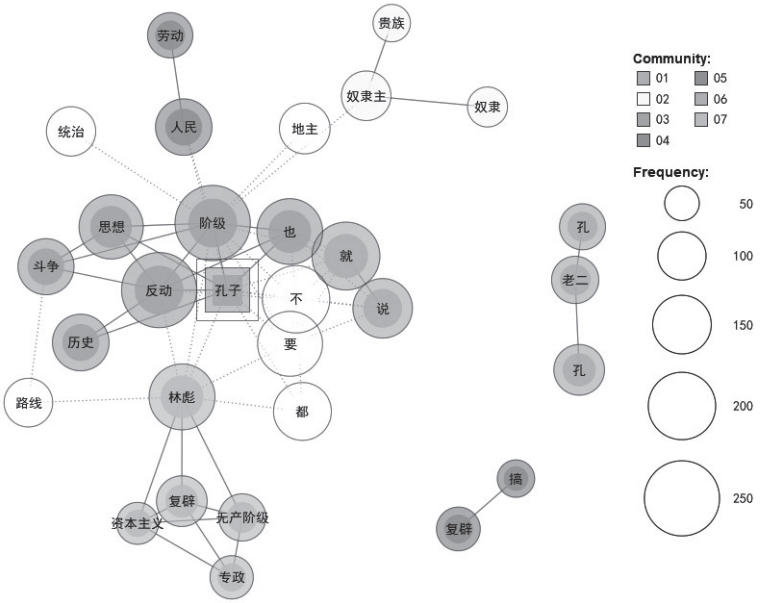
量が漸増したことが分かる。儒教という言葉はこの集計した1976年から1995年にかけて特に1992年まで非常に低調な数値に終始している。また1979年の各語句言及量に注目すると、儒教を除く三種の語句が６件ほどになっているが、その後孔子を筆頭に1980年代はそれぞれ徐々に増加する。1976年、1977年の時点で儒家の登場回数が多い結果となっているが、1974年の批林批孔運動の際に儒家という言葉が関連語句の中で最も多く登場しており、その名残だと考えられる。

（２）　テキスト分析を用いた『人民日報』における孔子言及の分析
――ネットワーク分析

1974年以降孔子が『人民日報』でどのような言葉と共に登場したかをテキスト分析の手法を用いて分析する。『人民日報』において孔子に言及した記事を各年単位で収集し、KH Coder の共起ネットワークによって解析した[2)]。

図３で示したように批林批孔期の1974年に孔子は林彪等の言葉とともに登場し、階級闘争の対象となる反動分子の代表として扱われている。1974年から1989年までに孔子が毎年どのような言葉とともに『人民日報』に登場したかを図３に倣って図示すると次のようなことが分かる。1974年から1979年にかけて孔子は階級闘争の対象として批判される文脈で登場し、1980年から1984年にかけては研究されるべき対象として描かれ、1985年から1989年にかけては中国伝統や文化の体現者として登場することが分かった。

図３　『人民日報』において孔子とともに登場した言葉―1974年



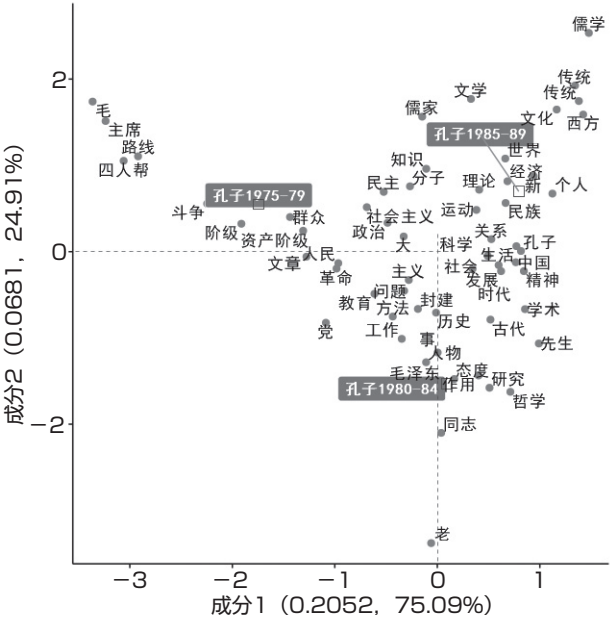
（出所）　著者が『人民日報』より集計し KH Coder のネットワーク分析により作成。

（３）　テキスト分析を用いた『人民日報』における孔子言及の分析
――対応分析（１）

1980年代の機関紙の中で孔子がどのような文脈で登場したかを分析する。（２）で分類した三時代（1975-79年、1980-84年、1985-89年）に基づきテキスト分析を用いて孔子が人民日報の中でどのような言葉とともに登場したかを表したものが**図４**だ。人民日報データベースから孔子が登場する記事を三時代毎に集め、KH Coder の対応分析により統計処理を行った。

対応分析はデータ集合の同時布置を示す分析方法である。三時代の分類と各時代に特徴的な語を図示しており、原点（0, 0）から離れるほど各時代において特徴的な言葉だ[3)]。図４を分析すると次のようなことが分かる。1975-79年に関しては孔子が階級闘争の文脈で登場し、打倒されるべき対象として描写されていることが分かる。1980-84年に関しては孔子の持つ効果（作用）について研究するという文脈で登場する。そして1985-89年では中国の文化や伝統を代表する象徴として扱われるのと同時に、西方といった言葉とともに語られることから、西洋

図４　三時代の比較（1975-79年、1980-84年、1985-89年）



（出所）『人民日報』より著者が集計し、KH Coder により対応分析を行った。

文化に対して中国を代表するアイコンとして登場していることが分かる。

（4）　テキスト分析を用いた『人民日報』における孔子言及の分析
――クロス集計

（2）で分類した三時代では孔子批判期、孔子再評価期、孔子肯定的宣伝期という名前でラベリングが可能だと指摘した。この批判、再評価、肯定という3つの段階に分化できることが分かる。この3つの意味を指す言葉を**表1**にあるようにコーディングルールとして用いて各年の傾向を図示した（**図5**）。これは表1の検索単語が出てきた際に、その分を三種類のコードに分類したうえで、各年の3つのコードの度数を集計したものだ。

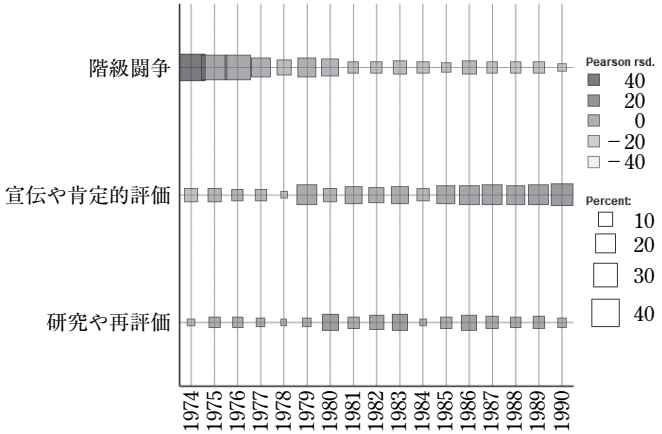
図5のようにこの3つの傾向は一方向的に定められていたのではなく、年によって強く現れたり弱く現れたり変化があることが分かる。階級闘争のコードは1976年文化大革命が終了すると減少傾向を示し、1981年以降は明確に低水準で推移している。1979年は宣伝や肯定的評価に一気に傾斜した。しかし、1980年から

表１　テキスト分析に用いたコーディングルール

観察するコード	検索単語（中国語原文）
階級闘争	斗争、革命、封建、阶级、批评
研究や再評価	研究、评价、作用、考虑、性质
宣伝や肯定的評価	传统、民族、世界、积极、中国

（注）　辞書に記載のある類義語や観察するコードの時代的文脈に基づき作成[4)]。

図５　各年の三つのコードのクロス集計―1974～1990年



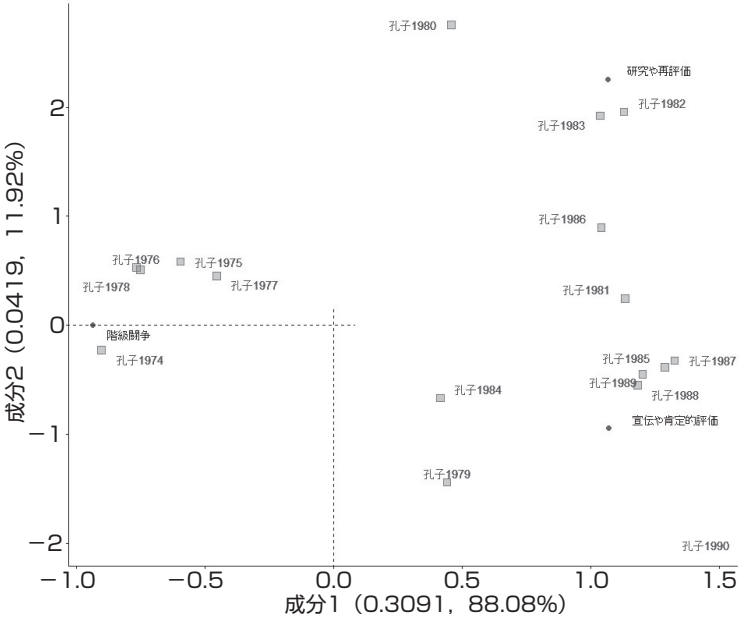
（出所）『人民日報』より著者が集計し、KH Coder によりクロス集計を行った。

1983年にかけては研究や再評価が増加し、高水準で推移した。その後1984年は図１で指摘したように絶対量が少ないうえ、内容も三種類のコードいずれにもあてはまらない結果となった。宣伝や肯定的評価は1979年に増加するも、その後1984年まで増減をするが1985年以降は増加し、高い水準を保っていることが分かる。

（５）　テキスト分析を用いた『人民日報』における孔子言及の分析
――対応分析（２）

（４）で用いた３つの意味を指す言葉をコーディングルールとして用いて各年の傾向をプロットした座標図を作成した（図６）。（２）の結果から考えれば各年の位置は階級闘争から研究や再評価、宣伝や肯定的評価へと時計回りに移動するはずだ。

図６　３つのコードをもとに各年を位置づけたプロット図



（出所）『人民日報』より著者が集計し、KH Coder により対応分析を行った。

図６を分析すると次のようなことが分かる。1974年以降1990年まで基本的には階級闘争から研究や再評価、宣伝や肯定的評価へと移行している。図の左側から右上へ、右下へと時計回りに移行していることが見て取れるため（２）で分析した批判、再評価、肯定という３つの段階による分類が概ね的確であることがわかる。しかし1979年と1984年に関してはその時計回り移動の傾向に反する動きをしている。これには次のような理由があるように考えられる。図１で示したように、1979年は孔子に関する言及量が減少した傾向があり、１つの記事内容のコンテクストが同年全体のコンテクストに影響を与える程度が大きいため、その他の年代に比べて誤差が大きいことだ。なおその少数の記事のコンテクストが全体的に見るとその他の年代と異なる傾向を示していることを考慮すれば、これは1979年と1984年に、それまでの孔子に言及されていたコンテクストの転換があったからだと考えるべきだろう。

上記のような曲折に富みながら概ね三段階に大別される政治思想工作における孔子の地位の変化は、宣伝部等の機関または宣伝部関連の共産党幹部によって予

め綿密な計算に基づいて計画され、それが粛々と実行された結果なのだろうか。図1から図6までを総合すると、孔子の登場するコンテクストの変化に明確な変化は起こるものの、そのような綿密な計画が周到に準備されていたかは不明確である。仮にそのような計画が予定されていたとしても以上の図からわかるようにその方針が一方向的に忠実に履行されることはなかった。そのため、本章ではそのような孔子の政治思想工作における地位の変化は不可逆的かつ計画的にもたらされたものでは決してないということを強調したい。

3　1980年代孔子宣伝の動態的分析
――『紅旗』、『求是』における孔子の言及

本節では孔子が政治思想工作において重要な役割を果たした『紅旗』、『求是』の中でどのようなコンテクストで言及されたかを分析する。次頁の**表2**は1976年から1989年までに発行された『紅旗』、『求是』において孔子がどのように言及されたかを示した表だ。

1976年に『紅旗』で言及された孔子は批判の対象としての文脈で登場している。『水滸伝』の評価をめぐる文脈で「孔孟の道（儒家思想）と投降主義を批判し、反修防修し、上部構造において無産階級の資産階級に対する全面的な専制を強めるのだ」とある（紅旗、第2期、1976：26）。批林批孔運動は1974年に終了したものの、文化大革命時代の孔子批判の傾向が明確に認められる。その後ほとんど登場することがなかったが、1981年に行われた中央宣伝の思想戦線問題座談会で胡喬木が行った講話の中で孔子の格言が引用されている（紅旗、第23期、1981：16）。なお、この時点でも同講話の中で登場する文脈はさほど孔子に対して肯定的な評価を積極的に行っているものではないが、同時期に共産党幹部による発言の中で孔子の言葉を引用したものは少なく、直後に毛沢東の格言も引用していることも鑑みれば重要な発言だと考えられる。

『紅旗』や『求是』における記述を分析してまず指摘できる最も大きな特徴は、『紅旗』や『求是』において孔子が言及された数が極端に少ないということだ。1976年において孔子への批判的な内容があるのは十分理解できるものの、興味深いのは1984年の段階で毛沢東が孔子を批判した発言が引用されていることだ。第Ⅰ章で分析したように『人民日報』における孔子の登場するコンテクストが1980年代前半には変化していたことと対照的に、『紅旗』では1984年においても再評価や肯定的評価等の要素は見出すことができなかった。同様に1980年代後半の

表２　『紅旗』1976～88年、『求是』1988～89年における孔子の言及

発行年	政治思想工作に関する言及	孔子の言及
1976	毛沢東の思想を強調	孔孟は批判されなければならない。
1977	毛沢東の思想を強調	—
1978	左への批判	—
1979	安定団結、社会主義建設	—
1980	四つの近代化、党の強調	—
1981	党性、双百	８月８日中央宣伝の思想戦線問題座談会での講話で孔子の格言を引用。
1982	精神文明	—
1983	双百の強調、汚職やモラルの啓発 四有公民、愛国、祖国統一	文芸は創作的でなければならない。
1984	中華民族の優良な伝統、五講四美	毛沢東による孔子批判の解説。
1985	中国特色、知識人を評価	２千年以上にわたる封建主義の要素が文化の深くに一体化した形で残っている。
1986	「左」の強調減少 共産主義を強調	現代化と魯迅の作品の関係―愛国。
1987	西洋化一辺倒への批判 中国伝統哲学の評価	哲学も変化しなければならない。
1988	中華を振興	文化伝統と教育
1989	中華を振興、共産主義の強調	中体西用

（出所）『紅旗』『求是』より著者が作成。

『紅旗』における孔子への言及も孔子が持つ中国文化へのポジティブな影響力等に関する内容は全く観察することができなかった。以上のように、『紅旗』と『求是』において孔子への言及が非常に少なく、内容にも類似性が認められないことから機関紙における性質の違いがあることが分かる。さらには『紅旗』と『求是』は隔週に発行される雑誌であり、紙面も限られているため政治思想工作において孔子より重要度の高い政策関係の記述が優先されたのではないかと考えられる。

4　本章の結論

本章では1980年代の機関誌における孔子がどのようなコンテクストで言及されているかを動態的に分析した。『紅旗』、『求是』を分析すると孔子に関する言及

自体が『人民日報』に比べて少なかったことが分かる。これは『紅旗』、『求是』が隔週に発刊されるうえ、毎号の記事数およびページが少なかったことが直接的な原因に考えられる。ここから分かることは孔子が1980年代の政治思想工作においては核心的な地位ではなかったか、意図的に登場回数や内容を制御していた可能性だ。第Ⅱ章で述べる共産党幹部の認識等を踏まえて総合的に判断すればこの段階では孔子の積極的な宣伝には政治思想工作という文脈では躊躇や抵抗があったことを示唆している。一方で『人民日報』に登場する孔子に関する記事をテキスト分析によって研究すると、大まかに３つの段階に分けて孔子の地位が変化したことが分かる。第一期は1976年から1979年にかけて孔子を階級闘争の対象とみなす「孔子批判期」、第二期は1980年から1984年にかけて孔子を研究の対象「孔子再評価期」、そして第三期は1985年から1989年にかけて孔子を肯定的に宣伝する「孔子宣伝期」だ。ここで注意が必要なのは1979年、1984年においては大まかな各期のトレンドに沿わないコンテクストで孔子が登場することだ。これは孔子の宣伝が予め周到に計画された不可逆的であり、決定的な政策であったわけではない可能性を持つことの証左だといえる。

また、孔子の地位が肯定的な評価へと変化したことと、1980年代を通じて最多でも年間80本の記事にとどまっていることは一見矛盾があるようにも思える。これは、党内に一致した見解または政策としての指示がなかったか、孔子に言及する記事の絶対量と記事の内容をあえて調整することで意図的にバランスをとったとみなすことも可能だ。そのような個別具体的な宣伝部門における方針を裏付ける史料は発見できなかったが、いずれにせよ1970年代末から1980年代にかけて孔子の地位の変化は起伏にとんでおり、その中できわめて漸進的に向上したことが分かる。

本章において新たに浮上した論点は、上述したような機関紙における孔子の言及量の増減を裏付ける論拠があるのかという問題だ。1995年に記録した年間約80件という限定的な孔子の言及量や不安定に増減を繰り返す宣伝傾向はどのような事実に基づいたものなのだろうか。そのような事実を裏付ける論理的根拠を第Ⅱ章、第Ⅲ章では示すこととしたい。

Ⅱ　共産党幹部の孔子に対する認識

本章ではまず中国共産党幹部の文化大革命以降の年譜、文選、回顧録、書信集

等の分析を通じて1980年代における共産党幹部の孔子に対する認識を把握する。次にそれが政治思想工作の具体的政策としてどのように表出したのかを中国共産党中央宣伝部等が発行した文書をもとに考察する。

1　共産党幹部による孔子の言及

文化大革命以降の中国共産党幹部による孔子への直接的な言及は非常に少ないが、鄧穎超や胡喬木等に関しては書信集や回顧録において孔子の再評価及び宣伝に関与したことが示唆されている。

鄧穎超は孔子の再評価及び宣伝に積極的だったといえる。谷牧回顧録によれば鄧穎超は1983年の夏に曲阜にある孔子関連の施設を見学し、修復の必要性を痛感したことで孔子基金会の設立を決意したとある（谷、2008：457）。孔子基金会の説明は次章で詳述するが、孔子を宣伝するうえで非常に大きな意義を持った組織だった。谷牧はその後孔子基金会の名誉会長に就任するが、この人選も鄧穎超から打診に応えたものだ（谷、2008：458）。谷牧は鄧穎超及びその夫である周恩来を強く慕っていたとされている（全国政協・中央党史研究室・中央新聞記録電影制片場、2017）。谷は建国以前から山東省で執筆活動をしており、建国後は山東省済南市市長等を経て1980年代は鄧小平の右腕として経済政策や対外開放政策、さらには旅行業の進展を指揮した。そのほか鄧穎超が孔子基金会の設立にあたって胡耀邦の了承を得たことが谷牧の回顧録に記されている（谷、2008：457）。これは孔子関連施設の修復を党幹部らが了承していたことを示しており重要な事実であるが、文化大革命の批林批孔運動による被害からの復旧という意味合いもあり、政治思想工作における孔子の地位という意味においてはこの事実だけをもって共産党幹部が孔子の再評価及び宣伝に積極的だったという証左とみなすことはできないと考えられる[5)]。

胡喬木は1982年７月13日にしたためた書信の中で鄧力群と郁文へ向け、孔府に保管されている史料を保存し、人員を派遣し上記を検討するように指示を与えている。「任継愈同志の手紙を見てください。彼の意見は重視する価値があり、中宣部から山東省委宣伝部に手紙を出して事情を酌量して処理してもらうよう考えてください。これらのことはこれまで誰も注意していないので、長引けば損失があります」（胡喬木、胡喬木伝編写組、2015：371）。任継愈は当時の中国社会科学院宗教所所長であり、山東省出身である。７月１日に任は胡に宛てた書の中で次のように述べている。山東省曲阜の孔府には明、清さらに民国時代の資料が20万以

上あり、「我々の封建社会、特に明清社会の知識を深める」意義がある（胡喬木伝編写組、2015：371）。ここで任はあくまで、歴史的な学術的価値を評価しており、共産党の政治思想工作との関連で孔子や儒教といった概念が共産党の統治に資する等という内容を示しているわけではない[6]。注目すべき点は、胡喬木が中国社会科学院宗教所所長と連絡していることであり、ここから胡が孔子関連施設を単なる文化財ではなく宗教にかかわる事柄であるとみなしていたことがうかがえる。なお、1980年５月28日に胡は中国社会科学院第一回党代表大会において「中国社会科学院的根本任務」と題する文章を発表した。その中で胡は社会科学を現代的に解釈し、マルクス主義の指導的地位を用いて党の政治路線に利用するという方針を強く主張している（胡喬木、1994：140）。そのため胡は孔子をマルクス主義の観点から再評価することを党の政治路線に反映する意向があったとうかがえる。さらに重要な点は、中国共産党中央宣伝部の現役の部長と副部長に直接手紙を出していることだ。この書信に登場する鄧力群と郁文は当時の中国共産党中央宣伝部部長・副部長である。孔府が補完する史料の保存を国家文物局という行政機関を通じたものでなく共産党の宣伝部を通じて行われていることから、この孔子関連の施設の修復が政治思想工作の一環として組み込まれたことが指摘できる。

以上のように胡喬木が政治思想工作における孔子の再評価に関与していたことは示されたが、胡は単に積極的に孔子の再評価を行ったわけではなかった。1982年に胡喬木より命を受けた鄧力群は1984年５月６日に全国文物工作会議において「保護・研究・利用――対文物、博物館工作的幾点意見」と題する文章を発表した。同文書では文化財の保護に関して保護し、利用する旨を指示したものの孔子への具体的な言及はなかった（鄧力群、1998）。さらに胡喬木が孔子の再評価に対して慎重な姿勢を保っていたことをうかがわせる資料がある。1986年３月４日に胡喬木は匡亜明に対して「わが国の哲人に対して系統的な評価をし、孔子の研究していることに私は賛成している。しかしこれは重要な事であり学術の民主を尊重しなければいけない。数人の発言で決められないため、急ぐ必要はないのです。理解を得られればと思います。」と述べた（胡喬木伝編写組、2015：571）。匡亜明は次章の孔子基金会の文脈でも登場するが、南京大学名誉校長で孔子再評価において理論工作を行った極めて重要な人物だ。匡は建国以前山東省で宣伝部門の要職を歴任し、1946年に山東民主省政府特派司法庁長である張伯秋とともに高級参議として曲阜を訪れている（人民日報、1946年10月３日）。匡はマルクスレーニン主義に基づいて孔子を再評価することを主張し、1980年代前半から孔子の肯定的側

面を強調した文章を発表している。その中で三分法という理論に基づいた主張をしておりそれは、「（１）孔子思想の中で封建社会の統治者の特殊利益を直接擁護するようなものはすべて必ず徹底的に批判し、徹底してそれと決裂する（２）孔子思想の中で一定程度深淵な知恵または知恵の萌芽があるものは真剣に批判、検討の上、“古為今用”する。（３）孔子の思想の中で今もなお生命力があり現実的な意義があるものは継承し発展させる」という内容だ（匡、1985：10-24）。匡亜明のこの三分法は共産主義イデオロギーと元々相いれないはずの孔子や儒教的概念を正当化するうえで重要な理論的貢献となったものの、以上の書信のやりとりから匡亜明が胡喬木と孔子に関して議論を交わしており、両者の間には意見の隔たりがあったことが分かる。胡喬木が孔子の宣伝について急進的な変化ではなく、漸進的な再評価や宣伝を望んでいたのに対して匡亜明は胡に比べて急進的な政治思想工作への組み込みを志向していたことが指摘できる。

谷牧回顧録によれば匡亜明は鄧穎超からの打診によって1984年に孔子基金会の初代会長に就任している。このように鄧は、山東省に縁があり党内でも経済政策を担当し、地位がある谷を匡亜明という党外の知識人と結び付けて孔子の宣伝に関する任務に従事させる等孔子の再評価や宣伝に対して積極的であったことが分かる。しかしながら鄧穎超に比べて胡喬木は抑制的な再評価を志向しているため、このような書信のやり取り等は孔子に対する認識が党内幹部の間で高度に一致していたわけではないことを示す証左だと考えられる。なお、鄧小平は同時期に胡喬木や鄧力群らと政治思想工作や憲法に関して度々議論を重ねていることが『鄧小平年譜』より確認できたものの、その中で孔子に関して直接的な言及に至ったものは確認できなかった（中共中央文献研究室、2004）。また、孔子基金会設立に主導的な役割を果たした鄧穎超による『鄧穎超文集』には孔子に関する言及はなかった（鄧穎超、中共中央文献研究室、1994）。

2　政治思想工作における重要政策と孔子への言及

1980年代に出された政治思想工作に関する重要な文書（**表３**）を三種類に分けるとすると、党内の規律に関するもの、青少年の教育に関するもの、党の歴史に関するものに大別できる。党内の規律に関するものでは例えば1981年２月28日に中央宣伝部、教育部、文化部、衛生部、公安部から発行された「関於開展文明礼貌活動」的通知では、「五講四美」の重要性が提起されている。「五講」とは文明、礼儀、衛生、秩序、道徳を重視し、「四美」とは心、言語、行動、環境を美しく

表３　1980年代の主な政治思想工作に関する重要文書

発行年月日	発行機関	文書名
1981年２月28日	中央宣伝部、教育部、文化部、衛生部、公安部	「関於開展文明礼貌活動」的通知
1982年５月28日	中共中央	関於転発「深入持久地開展“五講四美”活動争取社会主義精神文明建設的新勝利」的通知
1984年３月17日	中央宣伝部	「関於加強革命伝統教育的意見」的通知
1884年５月29日	国務院批転	「国家教委関於加強高等学校思想政治工作的決定」的通知
1987年５月29日	中共中央	「関於改進和加強高等学校思想政治工作的決定」
1988年12月25日	中共中央	「関於和加強中小学徳育工作」的通知
1989年７月28日	中共中央	「関於加強宣伝、思想工作」的通知
1989年９月29日	江沢民	「在慶祝中華人民共和国成立四十周年大会上的講話」
1990年１月10日	李瑞環	「関於弘揚民族優秀文化的若干問題」

（出所）　政治思想工作に関する文書[7)]より筆者抜粋

すべきものだということだ。1982年５月28日に中共中央から発行された関於転発「深入持久地開展“五講四美”活動争取社会主義精神文明建設的新勝利」的通知においても同様の「五講四美」が示されており、物質文明に対して社会主義精神文明という概念を用いて党内幹部、青少年や部隊における政治思想工作の方針を示している。青少年の教育に関するものでは1884年５月29日に国務院が指示した「国家教委関於加強高等学校思想政治工作的決定」的通知があり、これらの中では引き続きマルクス主義理論に基づく教育を重視する指示が出されていた。また、党の歴史に関するものでは1980年代前半には薄一波が1983年10月16日に「整党是関係我們党的興衰的大事」（中共中央文献編輯委員会、1992：415）という文書を委員会で発表しているほか、1989年９月29日に江沢民が行った講話「在慶祝中華人民共和国成立四十周年大会上的講話」や1990年１月10日に李瑞環が行った講話「関於弘揚民族優秀文化的若干問題」では、中国の歴史を概観したうえで中国共産党の存在意義や愛国主義精神の発揚を訴えている。

以上のような1980年代の党や政府の政治思想工作関連の文書から読み取れるの

は、共産党が内部規律や社会の拝金主義的風潮に強い危機感を持っていたということだ。そのような文脈で言及される「五講四美」、「伝統」、「道徳」といった言葉は中国共産党の革命伝統や社会主義道徳を指しており、孔子や儒教等の中国古来の伝統思想に関するものではない。そのため孔子に関する具体性の高い言及は政治思想工作に関する需要な党や政府の公式文書には登場していない。同様に1980年代には文化大革命を意識した文書も散見される。宣伝部の公式文書においては度々「左」の思想を徹底的に批判する必要性が提起されている。政治思想工作においては、文化大革命終了後の「三信の危機」に対応する必要があり、孔子に関する言及はほとんど見られなかったのではないか。また、それはラディカルな社会主義を主張するような左派の人々から批判を受けることを防ぐこととなった。胡喬木の書信における匡亜明への説得の言葉にはそのような意識が表れていると考えることができる。胡喬木に関しても労働問題に関する政治思想工作等取り組む課題は多いなかで孔子や伝統価値に関連する任務は特別多いというわけではなかった。

政治思想工作に関する公式文書の中に孔子が言及されたものが極めて少ない一方で孔子や儒教の現代的意義を肯定的に高く評価していた匡亜明は党内政治に関係のない知識人として積極的に言論を発表することができた。文化大革命の際に匡亜明はそのような伝統価値への評価を理由に造反派による厳しい批判に遭った[8)]が、文化大革命以降そのような激しい政治運動はなく、百花斉放、百家争鳴の元自由な言論空間が確保されたことは匡のような知識人の主張を強めることとなったといえる。

それでは1980年代において、第２節でみたように党が発行した政治思想工作関連の公式文書には孔子の言及がなく、第１節で分析したように胡喬木や鄧穎超、谷牧等の共産党幹部の記録から孔子の再評価及び宣伝に積極的な行動が観察される事実はどのような整合性を持っているのか。第Ⅰ章において行った『人民日報』の分析で分かったように孔子の政治思想工作における地位は明確な変化を遂げた。しかしその過程は曲折に富んでおり、絶対量としても意図的に抑制的であったかのような推移を見せ、あたかも水面下で進められたような漸進性を持っていた。本章の第１、２節で行った分析から分かるように、一部の共産党幹部の脳裏には孔子の政治思想工作における地位の変化は自明であるものの、党の発行する正式な文書には明確な記載がないことは前章の漸進性、非被探知性という意味で共通していると考えられる。そのため、一見すると極めて局所的で非対称に見える政

治思想工作におけるかつ非一致性は整合性を持った現象だと理解することができる。

3　本章の結論

まず中国共産党の指導者たちの文選を分析した結果、1980年代前半に鄧穎超や胡喬木による孔子の再評価に関する動向を把握できた。しかし孔子の再評価は党内リーダーたちに高度な共通性や一致した見解はないことが分かった。孔子を再評価する志向を持った胡喬木、鄧穎超ら幹部たちは鄧力群、谷牧、匡亜明といった政府部門の要職担当者や党外知識人を内包する形で孔子宣伝の政策化を進めた。しかしながらこの際に幹部たちは目的、手段の共有は明確にはなされていないように考えられる。胡喬木による1986年の書信に見られるように孔子の宣伝の程度に関しては慎重な幹部もおり、積極的な宣伝に関しては一致が見られないからだ。そのため、1980年代前半に出来上がった、孔子を再評価し宣伝するような志向性を持った関係者の紐帯は、限定的であり強力なものではないといえる。これは、胡喬木等の宣伝部門の実務者が既存のイデオロギー共産主義イデオロギーや1980年代の党の正統性を向上するための一連の政治思想工作との整合性を重視したために、孔子の宣伝に慎重な姿勢を崩さず、漸進性を要請したからだと理解できる。胡喬木は建国当初から宣伝工作に深く関与し、文化大革命が終わった後は社会科学院を創設し、理論工作や『毛沢東文集』の編集、党史編纂作業に深く携わり、1980年２月には中国共産党第十一期五中全会では、中央書記処書記に選出され思想理論工作と中央重要文書の起草を担当した（胡喬木伝編写組、2015：613-865)。かつて共産党が徹底的に批判していた孔子を再評価するには非常に高度な論理的準備と党内工作が必要であり胡喬木はその点に自覚的であったため、慎重を期していたように考えられる。中国共産党の幹部として長い経験があり、文化大革命が終了し職責に復帰し党内で重要な任務を担当した胡喬木であっても急進的な孔子の宣伝に踏み切ることができなかったのは以上の状況があったからではないか。具体的には1980年代当時は共産党が「左」の残渣を排除すべく政治思想工作として数々の政治キャンペーンを展開していた。改革開放も進展が見られたものの一部の沿岸都市に限定され、共産党幹部の汚職や経済政策の諸調整に追われる中でこのような政治思想工作上「左」からの批判をまともに受けるような孔子の急激な地位の変化は意図的に忌避されたといえる。

次に漸進的ではあったものの孔子の政治思想工作における地位の変更を許容す

る政治環境があったことは重要な点だ。百花斉放、百家争鳴によって比較的自由な言論空間が確保されていたことは匡亜明等の知識人が孔子の地位を論じる際に重要な保障となったといえる。さらにこれは共産党幹部の名誉回復で鄧小平や周恩来、習仲勲といった文革末期に批判された者の再評価が進む年代と孔子が再評価された時代が一致している。文化大革命の反省をする中で文革期に批判された人員が政府等の要職に復帰する中で同時代に批判された象徴的観念や文化も復興された可能性がある。

最後に政治思想工作の文脈には出てこないことは非常に興味深いといえる。第１節で示したように回顧録や書信集等から鄧穎超や胡喬木らが孔子の再評価及び宣伝に関与したことを実証できた一方で、共産党幹部の文選や文集、更には政治思想工作に関する重要な政府文書には孔子はほとんど言及されていなかった。1980年代当時は改革開放期で経済改革や政治改革、さらには共産党内部の綱紀粛正等様々な政策課題が山積していた。そのような状況下で孔子のような政治思想的象徴をどのように政治思想工作の中で位置づけるか議論が盛んに行われた形跡は胡喬木や鄧穎超以外の幹部による文章や機関紙では全く確認できない。機関紙には「伝統を宣伝する」等の表現があるものの、孔子に関するものではなく、改革開放という大きな政治環境の中で付随的に議論された可能性がある。これは共産党幹部内の認識が高度に一致していなかったことに加え、上述したような文化大革命終了後の不安定な支配体制下で党内外の「左派」等による急進的な反対を避ける意向が明文化を妨げる帰結を得たのではないか。

「はじめに」で整理したようにゴールドマンは孔子を再評価するネットワークや新保守主義派の台頭を指摘したがネットワークとまでは断定できない。ゴールドマンはネットワークという言葉の定義を明確にしていないが、一般的にこの語は利益や目的を共有し、強い連帯感を持って行動する性質があると考えられる。本章で明らかにしたように、孔子を再評価する際に連携した中国共産党幹部や知識人間の紐帯は非常に緩やかで限定的だったことが指摘できる。孔子を評価し、宣伝するという点では一致していたものの、急進的な宣伝を志向する匡亜明と政治思想工作の整合性を重視する胡喬木の意見は異なるものだったため、ネットワークというほど強い連帯感を持った関係ではなく、孔子を評価するという限定的な共通点を持った者の緩やかな紐帯にすぎなかったと考えるべきだろう。次章では孔子文化祭開催過程を分析する中で孔子を再評価し宣伝することに積極的だった緩やかな紐帯が山東省政府等を含めた形で1980年代前半に既に形成された

ことを指摘する。

Ⅲ　地方政府による孔子宣伝
――曲阜市で行われた孔子文化祭を例に

1　曲阜市と孔子文化祭の説明と本章の意義

曲阜市は1986年に県から市へと名前を変更されたものの県級の地方政府であり、隣接する済寧市に従属する。中国で初めて「歴史文化名城」に登録され、国家旅游局により中国旅行名所40選として数えられ、孔庙、孔府、孔林は世界文化遺産として登録されている。1987年の曲阜年鑑によると、1986年末に人口は約54万人で、面積は895.93㎢だ（曲阜市地方史志編纂委員会弁公室、1987：23）。曲阜市（当時は曲阜県）は観光産業の１つの拠点として改革開放直後の1979年に開放されたものの、他の開放都市よりも一年間開放が遅れたのは文化大革命期終盤にあった批林批孔運動による損害の程度が深刻だったからだ（史料３）。孔子文化祭は1989年９月に孔子生誕2540年を記念し山東省曲阜市で開催された行事であり、前身は1984年から1988年に開催された孔子生誕故郷旅行（孔子誕辰故里游だ。第１回孔子文化祭には賓客として政治協商会議副主席谷牧（当時）や米国、カナダ、日本等様々な国から参加者が渡航した。以降毎年開催され、現在の中国語名称は中国曲阜国際孔子文化節となっている。

孔子文化祭に関する先行研究は主に旅行業や文化の宣伝効果を定量的に測定しようとした論文がある（蔡・劉、2012；張・朱、2010；王・劉、2009）。蔡・劉は、階層分析法を用いて孔子文化祭の宣伝効果を定量的に示し、孔子文化祭の目的を伝統文化の保護、祭のテーマを表現すること、地方のイメージ向上の３つであると結論づけた（蔡・劉、2012）。また、張・朱は孔子文化祭を具体例として文化や伝統にあわせた旅行プロジェクトの生存戦略をSWOT分析によって分析した結果、孔子を記念するという独特なテーマ演出が効果的であり、運営方法や商品化開発が奏功したことが祭の発展に寄与したとの見方を示した（張・朱、2010）。これらの研究は分析対象が2000年代以降に設定されているため1980年代の政治思想工作における孔子の地位を分析する際には一次資料の分析を含めた考察の必要性が生じると考えられる。本章では山東省档案館と曲阜市档案館で閲覧した档案史料をもとに分析することで、1984年孔子基金会設立の過程と、1989年の孔子文化祭開催にあたる中央地方関係を明らかにする。以下を通じて1980年代前半にはす

でに孔子を宣伝することに前向きな人物や組織による緩やかな紐帯が形成されていたことや、1980年代末の不安定な情勢を経て孔子文化祭が開催されるうえで省政府が果たした役割の重要性を指摘したい。

次に上記を論ずるために孔子文化祭を扱う理由と意義について述べる。上記のように曲阜市は行政単位としては極小であり、一見すると政治思想工作という規模感、普遍性を持った主題を論じる際に特別必要性を感じない。しかしこの孔子文化祭開催にあたる過程を分析することは実際の催しとして省政府や中央政府の支援を受けて開催されるため、機関誌における孔子の宣伝の動態的分析や共産党幹部の認識では把握できない具体的な予算配分や地方政府への指導の実態を史料に基づいて分析することができる。さらに孔子文化祭は1980年代から現在にまで続く唯一の中国政府公認の孔子を記念した催しであるため、代表性が認められる点も重要だ。これらの要件から改革開放以降多元化した政策決定過程の中で、地方政府が政治主体として政治思想工作の一部を担い、孔子を宣伝するに至った経緯を詳細に分析する。

2　孔子基金会

孔子基金会は1984年に設立された団体であり、孔子文化祭やその前身である孔子生誕故郷旅行の開催に際して支援した。なお、設立当初の財政規模は800万元に上り、現在も存在する組織だ（中国基金会中心、2018年）。孔子基金会は1984年設立当時民間により設立されたとされているが、山東省政府の档案史料によるとこの団体は山東省政府が人員を選出したことがうかがえる。「曲阜県委は省内外の関係同志との調整を経て、孔子に関係する資料を発掘し研究し、孔子関連の文物古跡を保護し補修するために孔子基金会を設立することを提案し、谷牧同志を名誉会長に、匡亜明同志（南京大学名誉校長、江蘇省人大常委会副主任）を会長にお願いし、（…中略…）そして省、市、県の関係同志若干名を副会長と理事に選出した。省委は曲阜県委の提案に同意し、孔子基金会は民間名義で創立された。ついては中央の審査と指示をいただきたい」（史料４）。上記のように名誉会長は当時の国務委員で対外開放工作や経済建設の主任であった谷牧、会長は南京大学名誉校長の匡亜明という人選になった。前章で紹介した通り、この人事は谷牧が鄧穎超からの依頼に応じたことを回顧録で証言している（谷、2009）。そのため孔子基金会は民間ではなく政府が関与し、実質的には公的な組織として設立されたと指摘できる。匡亜明は前章で説明した通りマルクス主義に基づいて孔子を再評価

した人物だ。胡喬木との書信のやりとり等から孔子の再評価及び宣伝を強く志向していたと考えられる。

孔子基金会は曲阜市と連携して『曲阜報』を発行するほか、1986年『孔子研究』という学術雑誌の発刊にも関与している[9)]。この雑誌はマルクスレーニン主義に基づいて孔子を再評価することが目的とされており、発刊にあたる言葉として谷牧は前出である匡亜明の三分法を引用している（中国孔子基金会、1986：3）。なお、この孔子基金会設立に関する電報（史料４）の宛先は楊徳中である。楊は中央弁公室と公安部門の担当者で、山東省出身であり、建国以前は山東省で公安担当者だった。このように谷、匡、楊等孔子基金会設立にあたっては山東省に縁を持つ政治家が多く関係していたことが指摘できる。また、山東省政府にとっては当時の国務委員である谷牧を名誉会長にすることで基金会や孔子文化祭にあたる庇護を得ていたのではないか。同時に谷牧にとっては対外開放を行い、曲阜市を経済建設の中に組み込むことを志向していたのではないか。1984年谷牧は鄧小平へ深圳等の経済建設の概況を報告した際に鄧小平から天津や寧波等でも対外開放政策を進めるように指示を受けた。当時は沿岸部から内陸側へ経済改革を進展させる必要があった経済状況であり、沿岸部への外資導入を前提としていた。インフラや天然資源等に乏しい曲阜市は港湾もなければ、農業地帯であり外資の誘致には条件がなかったところ、このような文化的なアイコンである孔子は良い契機になるという打算があったように考えられる。曲阜市は年鑑にある写真を参照しても、もともと資源も港湾もインフラもない農地だ（曲阜市地方史志編纂委員会弁公室、1987）。そのような地方小都市にとってこのような孔子というコンテンツは好都合であり、周辺都市である済寧市や山東省政府にも財政的、実績的に有効だったといえる。また、経済建設の実績を評価されることは省政府にとって有益なインセンティブが働いた可能性がある。

注目すべきはなぜ孔子基金会は民間により設立されたとする必要があったかという点である。証明する史料はないものの、民間からの求めに応じる形で政府が基金会を設立することを演出することで、政府機関の予算とは異なる形で予算配分をする根拠としたのではないか。同時にこの形式をとることで孔子を宣伝することに否定的な党関係者の反対を避ける、または非難された際に責任を逃れるための口実になると認識していたとも考えられる。いずれにせよ政府機関の単年度予算によって編成される予算の対象から外れることで、孔子基金会は孔子を宣伝するにあたり長期的な計画を備えた財政的自立性を獲得するに至った。1984年に

孔子故郷旅行という旅行プロジェクトに起源を持つ孔子文化祭にとってはこのように財政的な援助を長期的に行う資源供給元を得られたことは非常に重要な要素となった。

3　孔子文化祭開催にあたる地方政府間の関係

本節では孔子文化祭の開催過程を分析することで地方政府における分掌関係を明らかにする。以下では主に山東省省档案館と曲阜市档案館で閲覧した史料を用いて孔子文化祭開催過程では省政府が主導的な役割を果たしたことを指摘する[10]。中央地方関係の枠組みにおいては、中央政府は人事、財政、具体的政策という３つの手段によって地方政府を制御すると考えられている。そこで本章では以上の３点について着目することで孔子文化祭開催にあたる地方政府間の関係を考察する。

（1）　文化節開催における大まかな計画[11]

1984年に初めて行われた孔子故郷旅行（孔子故里遊）プロジェクトは1988年第５回孔子故郷旅行に至るまで毎年９月に開催される（史料５）。その後1987年９月10日に曲阜市人民政府が発行した「関於“孔子誕辰故里遊”活動方案的請示」（史料６）（孔子2538生誕旅行活動方案に関するお伺い）では旅行プロジェクトである旅行観光、文化交流を経済活動と結び付けて観光旅行型から経営開発型、利益型、社会型の活動へと変更するように指示がなされた。その中では「指導思想：“古きを現在に用いる”ことと“対外には開放し、対内には経済を活発にする”方針を堅持し旅行観光を文化交流や経済技術協力と組み合わせて旅行観光、文化交流、経済技術活動を融合させ、今年の郷里旅行活動を以前のような単純な観光旅行型から経営開発型、利益型、社会型の活動へと変え、歴史文化の特色を基礎とすることを保持しつつ文化旅行テーマプロジェクトに新たな突破があり、それにより多くの魅力を持たせ、経済協力活動により多くの発展を獲得し、より多くの経済利益と社会の総合的な利益を得て、より済寧を繁栄させ曲阜を振興させることでわが市の２つの文明建設の仕事を推進する」とある（史料６）。このように、孔子や儒教といったアイコンや政治思想にはほとんど言及せず、孔子を用いて商業活動へ波及効果をもたらすようにする経済政策としての意義づけが強調されていることが分かる。同様に、1988年10月15日『曲阜報』では物資局という政府部門が開催した経済技術商談を行った結果1840万元にも上る取引が成功したという経

済的な成果が強調されている（1988年10月15日『曲阜報』）。他方、孔子の教義や儒教の内容に関する具体的な言及はほとんど見られない。

1988年４月９日には当時中共中央顧問委員会常務委員の胡喬木が曲阜で孔子関連の古跡を見学した際に次のような題辞を書き残したとされている。「孔子に対する評価は、厳粛で真面目に揺るがない態度をとらなければならず、科学と民主の基礎の上に真理に向かって前進するのだ」（山東省情網）。第Ⅱ章で1980年代に胡喬木が政治思想工作や宣伝において重要な意思決定をする地位にあったことは指摘したとおりだ。この題辞から1986年当時匡亜明に対して送付した書信の中では孔子の宣伝に関して慎重な姿勢だったのが、1988年時点ではわずかに変化がみられる点が指摘できる。さらに胡喬木自ら曲阜の孔子関連施設を見学する行為自体が胡の構想した政治思想工作における孔子の地位の高さを暗示しているといえる。

1988年10月に『曲阜報』が第５回孔子生誕郷里節閉幕式を報じる中で、翌年は「孔子生誕節」と名称が変更されることを示している[12]（1988年10月15日『曲阜報』）。その翌年1989年４月11日に曲阜市政府は第一回孔子文化祭の総合的な活動計画を作成した。この文書「首届（1989年）孔子文化節活動総体方案」の中では呉学謙副総理の「孔子生誕2540周年を利用して活動の規模をより大きく」[13]させる指示が紹介されたほか、国家旅行局が１月18日に研究部署を開催し、山東省旅行局が実施方法を具体的に策定したことが述べられている。その中では「党の社会主義初級段階建設における中国の特色ある社会主義基本路線を指針とし、孔子の生誕を記念することをテーマとし、文化旅行を先導にし、中外経済技術協力を進めることを重点とし、記念活動を旅行観光や文化交流、経済技術協力と結合させ、孔子を記念し、文化交流、旅行を進め、開放を促進し、連携を推し進め、経済を繁栄させ、友誼を深める目的を達成する」とある（史料７）。このように党、社会主義初級段階建設、特色ある社会主義基本路線等という言葉が登場し、当時の政治環境や中国共産党による政治思想工作に適合させる形で開催目的を設定していることがわかる。1987年の文書から商業性を重視する方針は変わらないものの、対外的な「友誼」を促進するような要素が盛り込まれた。これは外国に文化を発信する際の拠点として考えたと同時に、曲阜市に外資企業を誘致する等の具体的な経済政策へ波及することを考慮してのものだと考えられる。

地方政府間の孔子文化祭に関する地方政府間の具体的な分掌関係は次に示すとおりである。山東省政府には孔子文化祭準備委員会が設置され、市級及び県級政

府に設置された孔子文化祭弁公室を統括していた。各級の孔子文化祭準備委員会及び孔子文化祭弁公室は孔子文化祭開催に向けて連携をとっていたものの、実際の活動計画の詳細は県級である曲阜市孔子文化祭弁公室が担っていた。孔子文化祭に関わらない政策は各級政府の部局が政府文書を取り交わしており、曲阜市に関しては孔子関連施設の修復等で済寧市、山東省、中央政府の部局にまで財政援助の要望が伝達されていったことが確認できた（史料８、史料９、史料10）。

曲阜市政府はその後４月19日、４月29日、５月16日に会議を行い、孔子文化祭の開催に係る問題に関して紀要を作成・修正した。５月５日には北京から主要メディアの記者が曲阜を訪問し取材を行ったほか、５月（日にち不明）に文化節組委会弁公室は「曲阜市首届孔子文化節工作実施一覧表」の中で活動の詳細な工程表や分担を明確化した。文化節開催にあたる作業を８組に分担し、展覧組の総目標を次のように設定した。「文字、文物、写真、図等を用いて内容を形象化立体化させる。観衆に直接感想を持たせ、孔子、孔子思想、孔林等祖国悠久の歴史や燦爛たる文化を理解し認識し、愛国主義の感情と民族の誇りを持たせる」（史料11）。以上のように「愛国主義」、「民族の誇り」という言葉は使われているものの、その他の小組には同様の表現は登場せず、全体の目標としてこれらの概念は特別強調されているわけではないことが分かる。その後７月１日「首届孔子文化節活動実施方案」の中で指導思想及び趣旨として述べられた内容は４月11日「首届（1989年）孔子文化節活動総体方案」と全く同じものだった（史料12）。

しかしながら７月８日山東省人民政府から「関係市人民政府と省関連部門」に対して送られた「関於印発孔子文化節活動方案的通知」では文化祭の活動趣旨が以下のように変化している。「孔子を記念し、民族文化を発展させ輝かしいものにすることを主題とし、記念活動を文化交流、旅行観光、経済協力と密接に結合させ、対外宣伝、対外友好、対外開放およびその他の交渉を推し進める」（史料13）。このように開催趣旨は「民族文化を発展させ輝かしいものにすること」「対外宣伝」「対外友好」という言葉が付加され、より複合的な意義を見出していることが分かる。

1989年９月から10月にかけて第一回孔子文化祭が開催され、10月20日には山東省孔子文化祭準備委員会が「関於首届孔子文化節活動的総結報告」により第一回孔子文化祭の成果を取りまとめている。その中で述べた収穫としては天安門事件発生以降に行った国際的文化活動として成功を収めた意義をまず強調している。その他にも民族文化をアピールし、対外人士との交流に一役買ったということを

「窓口」という言葉を用いて表現している（史料14）。この「窓口」という表現は1987年の曲阜年鑑にも記載があるが（曲阜市地方史志編纂委員会弁公室、1987：４）、この時点ではさらにこれは天安門事件以降に欧米各国が中国に対して行った経済制裁の中にあって、孔子文化祭が成功裏に開催されることで、外国の知識人や要人との数少ない接触機会となったという点で外的交意義があったという認識がうかがえる。

（２） 孔子文化祭にかかる曲阜市の財政収支

史料５より1989年10月10日時点の予算表と11月時点での決算表を比較すると、10月時点では収入が入場料15万元と省支出金35万元により合計50万元のため不足が55万元に上っており、曲阜市政府は省政府に対して30万元の援助を求めていることが分かる。しかしその後11月には６万元ほどの余剰金による収入が発生していてそれが市の金庫に保管された。当初の打算は把握できないが、結果として市政府に財政的な黒字をもたらしている。曲阜市としては15万元の支出があるものの、この祭開催期間中には数多くの政府要人、外国人、観光客等が訪れ曲阜市で宿泊し、地元料理を食べ、交通機関やタクシー等に乗って観光をすることで地元経済は非常に活況で税収が見込めるはずだ。その上この祭開催に際しては予めインフラ整備費等数々の補助金があり曲阜市政府にとっては経済的な意義が非常に大きかったように考えられる。省政府の立場を観察すればこの折衝の過程で省政府が市政府（県級）に対してインセンティブを確保する形で決着させたことで孔子文化祭の継続性を確保したのではないか。さらに曲阜市政府の収入のうち３割に当たる資金を省政府が援助して開催していることからこの催しが地方政府間の支配服従関係という意味で財政規律の側面でも実質的に省政府が強い権限を持っていたことがうかがえる。そのため、（１）で上述したような省政府による臨機応変な政策修正指示は市級政府、県級政府への制御を前提とし、中央政府や政治環境を敏感に察知した洞察力によって機動的に行われたと考えられる。

改革開放期における中国の中央地方関係を論じた研究では、1982年から1988年にかけて中央が地方へ財政分権を進めたほか、企業管理や経済決定権も地方政府に認めたことから地方政府は経済、政治的に自律性をえたことを指摘している（呉国光、2000）。以上のように孔子基金会や孔子文化祭の開催にあたって山東省政府が主導的な役割を果たしたのはこのような1980年代の中央地方関係を背景にしていることが分かる。具体的には、山東省政府は1984年に孔子故郷旅行を主催

するにあたりこのプロジェクトを旅行業という経済的なイベントとして性格づけることで関連政策の自律性を確保し、曲阜市または孔子文化祭を外資企業を呼び込むための窓口、外貨獲得の機会だと考えていた。さらには省内の隣接都市への波及効果も期待していたことは明らかで、地方政府間には互酬性が共有されていたことを指摘できる。孔子基金会の設立はそのような地方政府の機動性を確保するうえで非常に重要な役割を果たしていた。孔子基金会には谷牧や匡亜明といった中央で影響力を持った共産党幹部や理論家を備えることで庇護となると同時に、省政府が中央政府の意図から極端に離反することも予防しており、中央政府にとっても重要なコミュニケーションチャネルになっていたと考えることもできる。

4　本章の結論

本章では孔子基金会の設立にあたる過程や孔子文化祭の開催過程の研究を通じて次のことが分かった。まず、省政府が果たした役割の重要性だ。孔子文化祭では財政、人事、具体的な政策において市級、県級政府を統制していたことが分かった。さらに孔子基金会の設立にあたっても中央の鄧穎超等の命を受ける形でその意向を下級政府に伝達し調整したほか、孔子文化祭開催にあたっても1989年という政治的に変動が多い当時の情勢を分析して機動的に政策を修正したことが読み取れる。このように省政府が政治思想工作の動向を敏感に察知することで自律性を確保していたように観察できる。

地方においては中央の宣伝よりも早い段階で積極的な宣伝が行われていたことが分かるが、その内実は各級政府が抱く異なる利益を追求する形で孔子文化祭が扱われていたことが興味深い。曲阜市にとっては商業的利益やインフラ整備予算の確保につながる好機であり、同時に隣接する済寧市にとっても波及効果が期待できた。上述した史料等から山東省政府が商業性を重視していたように、実際の具体化段階においては現実の利益によって孔子文化祭が利用され様々な参加者の多様な利益を代表する形で開催に至ったと考えられる。このことは次のような時代背景を前提としている。山東省は改革開放による対外開放が行われた時期にあって、深圳、天津、上海等の沿岸都市から内陸部への開放の深化が行われていた。そのため旅行業、観光業は各地方政府が積極的に取り組んでおり、孔子文化祭を外資の誘導や外貨獲得につながる機会だと考える打算があっただろう。

それでは孔子文化祭の性格をどのように定義すればよいのだろうか。各級政府、基金会等の多様な利益が表出するこの催しには多義的な性格を見出すことができ

る。改革開放以降、政策決定過程に多様な主体が参加できるようになったことは既に多くの研究が指摘しているところだ。主に経済政策を分析した研究が多いものの[14]、本論文のように政治思想工作に関しても地方政府が参加する形で政策が実現されていたことが明らかになったのは重要だ。本来的にはこのような政治思想工作という広域性を持った政策は中央政府が指針を策定し、様々な経路を通じて政策を実現させる。その際に政府以外の主体は遮断されることが多いが、本件では商業主義と結合して特異な形態をなしている。興味深いのは、山東省政府や孔子基金会といった地方政府や基金会という半政府組織がこのような政策実施に大きな柔軟性をもたらせており、それが孔子の宣伝に大きく寄与したことだ。

第Ⅰ章で述べたが、政治思想工作は地方の住民が対象となっておらず、対象は海外の学者や経済活動に携わる外資企業の関係者だったと考えるのが妥当だ。また、そのような孔子文化祭が一見すると中央で胡喬木等が行っている政治思想工作とは異なる形で、地方で発露することは注目に値する。『人民日報』において孔子が肯定的なコンテクストで登場するのは1985年以降であるが、その前年から孔子文化祭の前身である孔子故郷旅行は始まっている。その時点では僅かに地方政府が先行しているものの、旅行プロジェクトという経済的側面が強調されることで政治思想工作上の不一致とはならず、1989年の孔子文化祭への名称変更時には1985年以降の中央による政治思想工作である『人民日報』のコンテクストと一致した肯定的評価を前面に出すことができたのではないか。第Ⅰ章では非被探知性という言葉を用いて機関紙における孔子の宣伝を分析したが、この祭の場合非被探知性は高くない。しかしこれは孔子を宣伝するという文脈ではなく、経済政策の一環として行われた旅行プロジェクトとして始まり、旅行局から支援を受けることで経済活動という隠れ蓑を得たと同時に、谷牧という共産党内で対外開放を指揮した実務者による政治的な庇護を獲得し、孔子基金会による長期的な財政援助、匡亜明による孔子宣伝を正当化する理論的根拠を得ることで、孔子文化祭は批判を受ける危険性を低減することができたのだ。

ゴールドマンは、1980年代後半に党外知識人と党内幹部の間に孔子を再評価するネットワークが形成されたことを指摘したが、本章を通じて判明したことは1980年代前半にはそのようなネットワーク、またはそれに準ずるような関係が構築されていたことだ。そしてその緩やかな紐帯は党内幹部、党外知識人、「民間組織」（実態としては政府の支援を前提として設立された組織）、地方政府によって形成されていたことが分かる。そしてそれらを仲介する存在として谷牧や理論化工

作を担った匡亜明らが地縁によって結合し、地方政府が商業主義の動機の元積極的に支援したといえる。

おわりに

本論文では1980年代の政治思想工作における孔子の地位の変化を研究し次のような結論を得た。まずテキスト分析を通じて孔子の政治思想工作における地位は約５年ごとに３つの段階を経て変化したことが分かった。しかしその間一部の期間では全体の傾向と異なるコンテクストの中で孔子が言及されることや、言及量が増減することがあり、孔子の政治思想工作における地位の変化は漸進的かつ曲折にとんでいたといえる。次に機関紙の中でも孔子の言及には差があったほか、当時の共産党幹部には孔子の再評価や宣伝に関して高度に一致した認識は存在しなかった可能性を指摘した。中でも山東省関係者を登用して宣伝に積極的だった鄧穎超と、急激な理論的変化を忌避し知識人の要求を宥める胡喬木の志向は異なっていた。最後に孔子文化祭の実施過程等の分析を通じて、孔子の宣伝に積極的な紐帯の参加者として地方政府（特に省政府）や党外の知識人等も重要な役割を果たしていたことが分かった。

以上の点を踏まえると先行研究が指摘するような孔子宣伝を志向する集団は実態としてはネットワークといえるほど強固な紐帯を持たず、緩やかな紐帯によって結ばれていたといえる。また、そのような緩やかな紐帯は1980年代前半には既に形成されており、政策として政治思想工作に部分的に反映されていた。重要なことは胡喬木ら党内の宣伝部門関係者は孔子の再評価や宣伝に重要な意義を見出していながら、政治思想工作の理論的整合性を重視したために急激な宣伝政策の変化を避け、抑制的な宣伝を行ったことだ。それが孔子の政治思想工作における地位の変化が極めて漸進的だった理由だと考えられる。また、孔子を再評価し宣伝することに肯定的な緩やかな紐帯は、多様な利益を横断する形で超越的に存在したものではない。むしろ当時の一番の論点は経済改革と政治改革であり、それに付随する形で政治思想工作が議論され、その中に孔子の再評価があったと考えるのが自然だ。

中国政治史の文脈で論じれば、1980年代の孔子再評価、宣伝の過程が非常に漸進的だったことは近現代に行われた康有為による「孔子改制考」と極めて対照的だ。胡喬木ら宣伝部門実務者が匡亜明等の党外知識人を抑制する形で漸進的な宣

伝を行ったうえ、党内組織工作の重要性にも自覚的でありこのような点で1980年代における孔子の政治思想工作における地位の変化は急進的な反発を免れたと考えられる。トロイの木馬のように巧妙に仕込まれた中国伝統の体現者としての孔子は、1990年代以降天安門事件を契機にした愛国主義教育の強化等の文脈でより積極的に宣伝されるようになった。先行研究が明らかにしているように1990年代以降共産党は伝統価値の宣伝や教育政策における地位を変更している。事後的に見れば孔子宣伝という一見すると共産党の共産主義イデオロギーから離反するような政策は漸進的ながらも文化大革命が終了した時点から行われたものだった。このような政策が実行された背景には共産党が共産主義イデオロギーを意図的に読み替えることで、文化大革命後に危機に瀕した体制の自己保存を図ったからだと考えられる。興味深いのは、ともに急速な現代化を目指した近現代と改革開放期の中国において孔子が登場するコンテクストが対照的な点だ。近現代は陳独秀や魯迅等が孔子や儒教の思想を封建主義的で現代化を妨げるものだとして批判した。一方で同様に現代化を遂行した改革開放期には孔子を評価することで政治思想工作の安定化が図られた。そのため共産党史、中国政治史の文脈で捉えれば1980年代に行われた政治思想工作の静かなる大転換は注目に値すべき重要な変化だと考えるべきだろう。

次に本論文の意義について述べる。本論文は共産党が孔子に対する認識を変更した過程を政治思想工作の文脈に基づいて考察し動態的に描くことができた。その一方で『人民日報』における言及数が年間80件に留まることに限界性を見出す反論が想定できるが、依然として1980年代の政治思想工作には特別な意味があると考えられる。なぜなら1990年代以降の孔子宣伝は1980年代における孔子の政治思想工作における漸進的な地位の変化を前提としており、換言すれば1990年代以降の孔子宣伝は1980年代の政治思想工作における漸進性が可能にしたからだ。その点で本論文は先行研究が強調する天安門事件による画期性を相対化している。これを時代的な早晩でなく構造的に捉えれば、孔子宣伝の原因を天安門事件による党内派閥勢力の変化や教育政策の変化に求めるのではなく、党内で政治思想工作が自律性を持ち文化大革命後に生じた三信の危機や左派の一掃に対して有効に対処しようとした能動性や機動性を本論文は強調していると言える。上述した過程を経て孔子は封建主義勢力の象徴から中国伝統の体現者へと漸進的に姿を変えた。これは政治思想に関わる重要政策における共産党の非一貫性の表れであると同時に、如何に中国共産党の政治思想工作による正統性の向上が困難であるか、

更には共産党幹部の認識が危機感に満ち溢れていたことを示す象徴的事例だと考えるべきだろう。

1）　リンチは思想工作について、政府が「コミュニケーションの流れを制御することで記号的な環境を構成すること」だと定義している。Lynch, Daniel C. *After the propaganda state: Media, politics, and "thought work" in reformed China*. Stanford University Press, 1999. 第二項。

2）　KH Coder はテキストデータを統計的に分析するフリーソフトウェアで、R にコマンドを送信することで解析する。KH Coder による中国語テキストの分析では Stanford POS Tagger を用いて語句の品詞を分類したうえで様々な種類のテキスト分析をしている。〈http://khcoder.net/〉左記より入手した。共起ネットワークにおいては Jaccard 係数に基づいて語句間の関連を測っており、プロットした語句は上位30語を設定した。

3）　プロットした語句は共起ネットワーク同様上位30語を条件として設定した。

4）　中国語辞書である辞海編輯委員会（1979）『辞海 修訂本』上海：上海辞書出版社。を参照して類義語等を当てはめた。

5）　孔子基金会設立に関して次章で詳述する。なお、山東省の档案史料によれば文化大革命の終了後、批林批孔運動で破壊された孔子関連施設の修復費として度々予算が計上され、1982年 6 月25日には山東省政府に対して30万元の財政援助を請求している（史料 1）。それでもなお損害が大きかったため更なる修復の必要性はあったものと考えられるが、鄧穎超が基金会を設立することで孔子関連施設の復旧や修復を希望していたことは次章で述べる孔子文化祭や政治思想工作における地位の変化の前提条件となった。なお、この時点では党指導部に一致した認識があったと判断することはできず、孔子関連施設の復旧にのみ焦点が当たっているため政治思想工作における地位が変容したとみなすには論拠に乏しいと考えられる。

6）　この任継愈による建議は文化大革命時代に陳伯達が発した指示と共通する点がある。陳伯達は「孔庙、孔府、孔林は焼き払ってはいけない、封建制度孔家地主の博物館として残すのだ、『収租院』のように。」という指示をした（史料 2）。孔子に批判的だった文化大革命時代と異なり、任はここで批判も評価も特に価値判断を行っていないが、封建制度の象徴として孔子関連施設をみなしていることは共通している。

7）　中共中央宣伝部弁公庁、中央档案館編研部編（1996）『中国共産党宣伝工作文献選編1957-1992』北京：学習出版社。中国共産党（1994）『党的宣伝工作文件選編. 2、1976-1982』北京：中共中央党校出版社。同 3 、 4 巻。

8）　匡亜明は文化大革命の時期に南京大学革命委員会闘争匡亜明専案組によって「大量の封建主義、資本主義、修正主義の毒素を散布し、青年を毒害で腐蝕した」（「打倒劉少奇在高教戦線上的黒幹将匡亜明」1969年 1 月、第24頁）として孔子を

評価したことで批判された。『中共重要歴史文献資料彙編第十六輯「文革」時期有関中国地方性暨地方領導人問題的批判資料専輯第六十二分冊江蘇問題之五』、中文出版物服務中心編、2000年３月。

９）『孔子研究』は現在も孔子基金会によって定期的に発刊されている。

10） 済寧市政府の档案館と済寧市孔子文化祭弁公室においては档案資料を閲覧することができなかった。

11） 文化節開催にあたる档案史料は新聞報道以外基本的に曲阜市档案館所蔵の首届文化節弁公室「首届孔子文化節資料彙編」を参照した。

12） 名称変更した理由には言及されていないが、1989年が孔子生誕2540周年であることを利用して更なる付加価値を求めたからだと推察できる。

13） 曲阜市蔵档案資料によると呉学謙が1989年年初に「今年は孔子生誕2460年記念なので積極的に宣伝するように」という主旨の発言があったと記載されている。呉学謙は年初に中国の伝統文化を評価する発言をしているが、孔子に直接言及した事実は確認できなかった。資料不足によるものか、曲阜市政府や山東省政府関係者が発言を都合よく解釈したかは不明だ。

14） 例えば俞可平は1980年代、1990年代を通じて政策決定に関わる政治主体が多元化したことを示している。俞可平（2002）「中国公民社会的興起及其対治理的意義」『中国公民社会的興起与治理的変遷』北京：社会科学文献出版社、第208頁。

参考文献

〈分析に用いたソフト〉

KH Coder（version 3. Alpha. 11）

R（version 3.5.1）

〈データベース〉

人民日報図文数据庫、［北京］：人民網、2018年１月20日、慶應義塾大学メディアセンターよりアクセス。

〈中国語〉

薄一波、薄一波著作編写組（2009）、『薄一波書信集』北京：中共党史出版社。

蔡礼彬、劉賢賢（2012）、「基於 AHP 分析法的現代節慶評估指標体系研究―以中国曲阜国際孔子文化節為例」『臨沂大学学報』（２）、135-141。

陳雲（1995）、『陳雲文選．第三巻』北京：人民出版社。

辞海編輯委員会（1979）、『辞海 修訂本』上海：上海辞書出版社。

鄧力群（1998）、『鄧力群文集 第二巻』北京：当代中国出版社。

――『鄧力群文集 第三巻』北京：当代中国出版社。

鄧小平（1993）、『鄧小平文選．第三巻』北京：人民出版社。

鄧穎超、中共中央文献研究室（1994）、『鄧穎超文集』北京：人民出版社。

範平（1989）、『党的建設辞典』上海：上海人民出版社。

谷牧（2009）、『谷牧回顧録』北京：中央文献出版社。
胡喬木（1994）、『胡喬木文集 第三巻』北京：人民出版社。
胡喬木、胡喬木伝編写組（2015）、『胡喬木書信集』北京：人民出版社。
胡耀邦（2015）、『胡耀邦文選』北京：人民出版社。
匡亜明（1985）、『孔子評伝』山東：斉魯書出版。
南京大学革命委員会闘争匡亜明専案組（1969）、「打倒劉少奇在高教戦線上的黒幹将匡亜明」中文出版物服務中心編（2000）、『中共重要歴史文献資料彙編第十六輯「文革」時期有関中国地方性暨地方領導人問題的批判資料専輯第六十二分冊江蘇問題之五』。
彭真伝編写組（2012）、『彭真年譜，第五巻，一九七九－一九九七』北京：中央文献出版社。
全国政協、中央党史研究室、中央新聞記録電影制片場（2017）、『文献記録片―谷牧』。
曲阜市地方史志編纂委員会弁公室編（1987）、『曲阜年鑑1987』山東：曲阜市地方史志編纂委員会弁公室。
王京伝、劉以慧（2009）、「曲阜国際孔子文化節発展的経験」『旅遊学刊』24（３）：10-12。
呉国光、鄭永年（1995）、『論中央地方関係』香港：牛津大学出版社。
習仲勲、中共中央党史研究室（2013）、『習仲勲文集下巻』北京：中共党史出版社。
葉剣英（1996）、『葉剣英選集』北京：人民出版社。
俞可平（2002）、「中国公民社会的興起及其対治理的意義」『中国公民社会的興起与治理的変遷』北京：社会科学文献出版社。
張静、朱紅兵（2010）、「基於文化角度的節慶旅游研究―以中国（曲阜）国際孔子文化節为例」『浙江旅游職業学院学報』（４）。
趙紫陽（2016）、『趙紫陽文集：1980-1989．第一巻，1980-1982』香港：中文大学出版社。
――『趙紫陽文集：1980-1989．第二巻，1983-1984』香港：中文大学出版社。
中国中央電視台（1988）、『河殤』北京：中国中央電視台。
中共中央文献編輯委員会（1992）、『薄一波文選』北京：人民出版社。
中共中央文献研究室（2004）、『鄧小平年譜．下巻一九七五－一九九七』北京：中央文献出版社。
中共中央文献研究室（2015）、『陳雲年譜．下巻』北京：中央文献出版社。
中共中央宣伝部弁公庁、中央档案館編研部編（1996）、『中国共産党宣伝工作文献選編1957-1992』北京：学習出版社。
中国共産党（1994）、『党的宣伝工作文件選編．２，1976-1982』北京：中共中央党校出版社。
――『党的宣伝工作文件選編．３，1983-1987』北京：中共中央党校出版社。
――『党的宣伝工作文件選編．４，1988-1992』北京：中共中央党校出版社。
中国共産党中央委員会（1976～1990年）、『紅旗』、『求是』。
中国基金会中心、2018年６月22日閲覧、〈http://data.foundationcenter.org.cn/About_82.

html〉。
中国孔子基金会（1986）、『孔子研究』1986（１）。
――、曲阜市（1988）、『曲阜報』10月15日。
周雪光、練宏（2011）、「政府内部上下級部門間談判的一个分析模型―以環境政策実施為例」『中国社会科学』（５）、80-96。
朱佳木、中共中央文献研究室（2015）、『陳雲年譜．下巻』北京：中央文献出版社。

［山東省档案館所蔵史料］

史料１：［A027-04-0215-001］山東省文化局「関於恢復曲阜孔庙大殿孔子等象的請示報告」、1982年６月25日。
史料２：［A027-03-0004-002］済寧地革委核心領導小組「中共済寧地区革命委員会核心領導小組対曲阜文物、古跡、山林保護和管理情況検査報告」、1970年３月26日。
史料３：［A027-04-0108-018］山東省革命委員会財政局、山東省革命委員会文化局「関於申請抜款維修曲阜、太山等地古建築物的報告」、1978年６月28日。
史料４：［A001-07-0283-003］中共山東省委、1984年９月22日。
史料８：［A027-04-0180-002］曲阜県文物管理委員会「関於恢復孔庙大成殿塑象要求解決資金料物的請示報告」、1980年６月30日。
史料９：［A023-04-0107-001］中華人民共和国外交部、公安部、中国人民解放軍総参謀部、中国旅行遊覧事業管理総局「関於増加対外開放城市的通知」、1978年６月６日。
史料10：［A027-04-0153-004］山東省文化局「関於進一歩加強曲阜文物管理的請示報告」、1980年４月９日。

［曲阜市档案館所蔵史料］

全て首届文化節弁公室「首届孔子文化節資料彙編」、1989年10月に収められた档案史料を参照した。以下資料彙編内の档案史料を示す。

史料５：［c1102-001-00144］首届文化節弁公室「首届孔子文化節資料彙編」、1989年１月。
史料６：［c1102-001-00144］曲阜市人民政府「関於“孔子誕辰故里遊”活動方案的請示」、1987年９月10日。
史料７：［c1102-001-00144］曲阜市政府「首届（1989年）孔子文化節活動総体方案」、1989年４月11日。
史料11：［c1102-001-00144］文化節組委会弁公室「曲阜市首届孔子文化節工作実施一覧表」、1989年５月。
史料12：［c1102-001-00144］「首届孔子文化節活動実施方案」、1989年７月１日。
史料13：［c1102-001-00144］山東省人民政府「関於印発孔子文化節活動方案的通知」、1989年７月８日。
史料14：［c1102-001-00144］山東省孔子文化祭準備委員会「関於首届孔子文化節活動的総結報告」、1989年10月20日。

〈英語〉

Brady, Anne-Marie (2007), *Marketing Dictatorship: Propaganda and Thought Work in Contemporary China*, Rowman & Littlefield Publishers.

Dotson, John (2011), 'The Confucian revival in the propaganda narratives of the Chinese government'. *US-China Economic and Security Review Commission*, 2011/7/20.

Fewsmith, Joseph (2008), *China since Tiananmen: From Deng Xiaoping to Hu Jintao*. *Cambridge Modern China Series*. Cambridge: Cambridge University Press.

Goldman, Merle (1999), 'Politically Independent Intellectuals', Goldman Merle・MacFarquhar Roderick. *The paradox of China's post-Mao reforms*, Harvard University Press. pp. 283–307 .

Lynch, Daniel C (1999), *After the propaganda state: Media, politics, and "thought work" in reformed China*. Stanford University Press.

Shambaugh, David (2007), 'China's Propaganda System: Institutions, Processes and Efficacy.' *The China Journal*, no. 57: 25–58.

Tsai, Wen-Hsuan, and Peng-Hsiang Kao(2013), 'Secret Codes of Political Propaganda: The Unknown System of Writing Teams.' *The China Quarterly* 214: 394–410.

Tyler, Tom R (1990), *Why People Obey the Law*. New Haven: Yale University Press.

〈日本語〉

呉国光（2000）、「地方主義の発展と政治統制、政治退行」天児慧編『現代中国の構造変動 4 ―政治・中央と地方の構図―』東京大学出版会。

林嘉言（1997）、『中国近代政治と儒教文化』東方書店。

樋口耕一（2014）、『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版。